

# バカロレアの「テキスト評釈」

## —文学を論理的、批判的に論じる型と公式—

\* 渡 邊 雅 子

1. はじめに
2. フランス語の論述問題の構成
3. 「論証」の文学ジャンルの問題を解く
4. 基礎問題
5. テキスト評釈
  - (1) テキスト分析の公式—テキストの身分証明書を作る
  - (2) 解釈の軸を決める
  - (3) 全体構成を精緻化する—解釈軸による構造化と順位付けの原理
  - (4) 論証と書き方の鉄則—ICQの原理
6. 文学の「テキスト評釈」にみる論理

### 1. はじめに

本稿では、テキスト評釈 (*commentaire de texte*) がどのように書かれるのかを、バカロレアの試験問題を解きながら分析し、文学を批判的に分析して論理的に書くためにはいかなる仕掛けが必要なのかをフランスの高校教育の文脈において考察する<sup>1</sup>。文学のテキスト分析の方法には公式があり、さらに評釈を書く型と論証の型があることによって、それらを習得することで高校生でも論理的かつ批判的なテキスト評釈を書くことを可能にしていることを明らかにする。これまで文学鑑賞とは異質のものとして捉えられていた、分析する視点を見つけ、複雑な議論をいかに理路整然と行うかといったメタ能力をつける効用が、テキスト評釈を行う訓練を通して行われることを指摘する。

フランスのバカロレアは、中等教育修了と大学入学資格を兼ねる資格試験であり、人文と社会科学系の科目はすべて3時間半から4時間をかけて書く論述形式で行われている(2022年現在)。数学や自然科学系の試験においても解答を記述によって説明できなければ合格しない。こうした論述問題を解き、記述によって解答を説明する能力は、日本の国語にあたる「フランス

語」教科で初等教育から段階的に積み上げられる「書く」訓練によって養われている(渡邊, 2021)。

フランス語教科の論述問題は、受験者全員が答えなければならない基礎問題と、三つの論述問題から一つを選んで書く選択問題から構成されている(2022年現在)。三つの論述問題とは、「テキスト評釈」、「ディセルタシオン (*dissertation*)」と呼ばれるフランス式小論文と「創作文 (*écriture d'invention*)」である。

「テキスト評釈」はディセルタシオンを書くための準備教育として、フランス革命後に考案されたものである(渡邊, 2021: 86)。そのため、テキスト評釈の書く型には、文学の批評を行うための基礎的な技術と様々な工夫が盛り込まれている。後述するようにテキストを分析する公式と書き方の型が生徒に明示されており、この公式と型を習得することで、高校生でも文学の解釈と批評を行えるようになる。換言すれば、文学を解釈するとはどのようなことなのか、批評には何が求められているのかを「テキスト評釈」の訓練を通して学ぶことができるのである。

まずはフランス語の論述問題の全体構成について簡単に説明しよう。それによってテキスト評釈がどのように位置づけられているかが分かる。

\* 名古屋大学大学院教員

## 2. フランス語の論述問題の構成

バカロレア試験のフランス語科目は、4時間の論述試験と20分の口述試験（別途30分の準備時間）からなる。論述試験は、提示された3ないし4作品の抜粋の内容を分析する基本問題（4点）と、一題の論述問題（16点）の2問（合計で20点満点）から構成される。基本問題は全員が答えなければならない必須問題で、提示されたテキストの基本的な解釈を問う。論述問題は、「テキスト評釈」、「ディセルタシオン（小論文）」、「創作文」の三つの形式でそれぞれ問題が出され、受験者はそのうちの一問を選んで答える。これら三つの論述の「書き方」の型がまずあり、問題はそれに付随する形で出題されるのがバカロレア試験のフランス語の特徴である。

「テキスト評釈」は、指定されたテキストの主題と表現スタイルについて、二つないし三つの分析軸を書き手が自ら決めて論じるものである。分析の視点を書き手が選び、最後に各項目で論じた分析を統合して3部構造にする型がある。日本の「読解」のように作者の意図やテキストの意味を読み解くのではなく、文学史におけるテキストの位置付けや文学ジャンル、ディスコースのタイプを特定し、作者の意図がいかに「表現されているか」の分析を主眼とする。

他方、「ディセルタシオン」は、問いの種類によって、閉じた問いには弁証法を、開いた問いには主題に基づく構成や分析の構成を基本構造として論ずる。

「創作」は、ある文学ジャンルと作家固有の表現様式を使って、与えられた文脈で手紙や会話、小説や演劇の一場面などを即興で書く。テキスト評釈や小論文と比べて一見自由度が高いように見えるが、実はそうではない。作家たちの文体を我がものとして書き分けたり、亡くなった作家の目を通して現代の状況を描写したりすることは、テキストの解釈の高度な応用であり、最も点数が取りにくい問題である。実際高校のフランス語教師は、リスクが高いと創作を選択することを生徒たちに勧めない。このように、三つの論述問題は、それぞれ異なるテキストの分析方法と文章表現の技術・能力を求めている。

## 3. 「論証」の文学ジャンルの問題を解く 一「人間に関する問い」16世紀から現代まで

2016年の「論証」のジャンルの問題を解いてみよう（Cassou-Noguès et Hébert 2018: 235-237, 以下Nathan社の参考書より）。小説や演劇、詩は日本の国語でも

扱われるが、説得のための多様な議論と弁論の形態を扱う「論証」のジャンルは、アーギュメントーション（*argumentation*）と呼ばれ、フランスに独特のものである<sup>2</sup>。

2016年の論証の問題に提示されたテキストは、葬儀における追悼演説であった（Cassou-Noguès et Hébert, 2018: 222-239）。著名な作家たちによる著名な作家への追悼の抜粋であり、「賞賛の演説」に分類される。「賞賛」は修辞学の定番として、古代ギリシア・ローマ時代から段階的作文法の一つに組み込まれている。古代ギリシアの修辞学に起源を持つ3種類の弁論、審議（法廷）弁論、議会（政治）弁論、および演示（慶弔の式辞）弁論の中の、演示弁論に分類されるものである（アリストテレス、2017）。

4時間の論述問題（2016年フランス首都圏の経済・社会科学（ES）と科学（S）専攻用）

コーパス：四つの追悼文のテキスト（抜粋）の提示（分析の資料となる）

1. バルザックの告別式でのビクトル・ユーゴーのスピーチ（1850年8月29日）
2. モーパッサンの告別式でのエミール・ゾラのスピーチ（1893年7月7日）
3. ゾラの追悼式におけるアナトール・フランスのスピーチ（1902年10月5日）
4. チェコスロバキアの公使ロバート・デスノスへの詩人のポール・エリュアールの追悼公式演説（1945年10月15日）（注：エリュアールもデスノスも第二次世界大戦のレジスタンス運動の参加者）

【基本問題】作家たちは四つのテキストで人間のどのような性質を讀んでいるか。

【論述問題（3問のうちから1問を選んで答える）】

テキスト評釈：アナトール・フランスのテキストについて評釈せよ（テキスト3）。

ディセルタシオン（小論文）：作家の本質的な役割とは、人間の偉大さを讀ることなのだろうか。提示されたテキストとあなたが授業で学んだテキスト、および個人的な読書によってあなたの考えを根拠づけて論証せよ。

創作：追悼の折に、あなたが崇拜する作品の作家につ

いての賛美の言説を宣言せよ（演説せよの意味）。その際に、提示されたテキストで実践された作家の賛美の追悼文の中で、あなたの視点から最も有効だと思われるものを再利用しても良い。

問題の構成から分かるのは、基本問題は全ての論述問題を解く基礎となり、テキスト評釈、ディセルタション、創作の順番に基礎から少しずつ距離を取って応用へと向かっていることである。

#### 4. 基礎問題

バカロレア試験における出題の順番には意味がある。三つの論述試験を解くには、まずテキストを理解する事が必要であり、その助けになるのが、冒頭に置かれた受験者全員に必須の基礎問題である。基礎問題の問いは、提示されたテキストの本質に目を向けさせるので、必ずこの問題から始めることを参考書は勧めている（Cassou-Noguès et Hébert, 2018: 15）。

テキストの理解のためには、まず鍵になる言葉を特定し、それらを分析することによって、これまで勉強した知識を呼び起こす。そして、基礎問題においても、その知識を構造化して全体構成（プラン）としてまとめて論述することが求められている。基本問題を解く全体構成には大きく分けて「分析的な構成」と「総合的な構成」の2種類があり、どちらの種類の構成で書くのかをまず見極める。「分析的な構成」が複数のテキストのそれぞれの特徴について論じるのに対して、「総合的な構成」は複数のテキストに共通するテーマを見つけて論じる。総合的な構成は、「総合の精神（*esprit de synthèse*）」があるために、フランスでは分析的な構成よりも価値が高いとされている（Cassou-Noguès et Hébert, 2018: 16）。分析的な構成は、テキスト評釈の基本構成であり、総合的な構成は、ディセルタション（小論文）の基本構成である。

例題の基本問題の問いは、提示された四つのテキストに共通するテーマに答えることが求められているので、「総合的な構成」で書く。構成を決定したら、分析のための必須要素をテキストから見極める。

「総合的な構成」で、答えの要素として期待されているのは、

- 1) テキストの「ジャンル」,
- 2) 提示された複数のテキストに「共通するテーマ」,
- 3) テキストで使われている「表現の効果」,
- 4) テキスト間の「共通点と相違点」,
- 5) 共通点と相違点に現れる「スタイルの分析」,
- 6) テキストは何を描写しているのか、

の六つの分析の要素である（Cassou-Noguès et Hébert, 2018: 16）。

基礎問題の論述を行う際には、三つの尊重すべきルールがある。一つ目には、基礎問題といえども、完全な文章で、しかも構造化して書くことである。六つの分析の要素を羅列したり、矢印や記号を使って省略したりしてはならない。二つ目には、解答は正当化されなければならない。つまり各主張は、一つないし複数のテキストの引用を伴って論証されなければならない。そして三つ目には、解答の目的を示す「導入」部分と、議論を振り返り問いに答える「結論」の部分が必要な事である。基礎問題といえども、長い論述問題と基本的な書き方の構成（導入、展開、結論の3部構成）は同じであるのがわかる。長い論述問題を解くための主な技術と論文構成は、この基礎問題で試される。バカロレア試験の問題の構成にも教育的配慮が示されているのがわかる。

以下に例題の解答例の構成を示す。

**基本問題の問い：**「作家たちはコーパスのテキストで、人間のどのような性質を讃えているか」<sup>3</sup>

##### 【導入】

- ・テキストの説明＝時代（19世紀と20世紀）と流派（ロマン主義、高踏派、自然主義、シュールレアリズム）の異なる作家による四つの吊辞である。
- ・問題提起（課題の表明）：いかなる美点を同輩のうちに讃えているのかを明らかにする。
- ・全体構成の告示：作品の美点とそれを可能にした作家の美点、結論として人と作品の分かち難さを示す。

##### 【展開】

I 主張：作家とは社会を見つめそれを理解することの出来る者である

論拠1＝人間と社会の観察者としての作家（作家により異なる観察方法を引用によって例証）

論拠2＝しかし単なるルポルタージュではなく、観察は作品のきっかけとなる（各作家の作品の特徴を引用によって例証）

II 主張：社会へのコミットメントを可能にするのは作家たちの性格である

論拠1＝作家たちの異なる性格とその例証

論拠2＝作家たちの異なる性格から生まれた作品とその目的の例証

Ⅲ主張：作品に見られる共通点と美点は、作家たちの革命的な性格である

論拠1 = 作品の革命的性質と語彙場 (champ lexical) による例証 (語彙場とは、ある性質を表す類似した語を使用する事により、それらの語の意味の関係が有機的につながり、概念の全体像をテキストで形成することを指す。文学作品の分析方法のひとつとしてフランスの中学・高校の授業で教えられている。)

論拠2 = 革命家としての作家が払った代償と賞賛：作家たちが受けた社会からの攻撃と、彼らの変わらぬ信念、それによってより高まる彼らと彼らの作品の価値をテキストから引用。

[移行] 作家たちの偉大な作品の勝利への称賛

**【結論】** 議論を振り返り何が論証されたか確認する  
 用辞で述べられた流派の異なる作家たちの美点が似通っているのは、作品の革新的な性格が作家たちの個性に優っているためである。

基本問題の解答例は、四つのテキストの相違点を示した上で、相違点を凌駕する共通点を「賞賛すべき点」というテーマから探る、総合の構成で書かれている。どのような視点から共通点を探るのかは受験者に任されており、その意味では「正答」があるわけではない。ここで試されているのは、展開部分の三つの主張が、それらを支える論拠と引用による例証で厳密に論証されているか、そして時代も流派も異なる四つのテキストを、決められたテーマで最後まで一貫して論じ切れるかどうかであり、そこに「総合の精神」が現れる。総合の精神とは、具体的には三つの主張が有機的に関連づけられて結論へと収斂して行くことを指す。基本問題であるだけに、分析資料として提示された四つのテキストの共通項を探っていけば、どのような結論が期待されているのか、それはどのような主張によって導かれるのかを考えることが可能になる。解答例では、賛辞されているのは作家たちの個性ではなく、彼らの作品に共通する革新的な性格と結論づけられている。作家の個性という「個別具体」に勝る「普遍的価値」であり、この場合は亡き4人の作家の作品に共通して表明されている「反抗精神」である。

このように基礎問題では、提示されたテキストの文学ジャンル、ジャンル特有の表現法と歴史的背景・文学史における意味などの基本的情報を示した上で、四つのテキストに通底するテーマを見つけることが期待されている。

## 5. テキスト評釈

英語のコメント (comment) に当たるコモンテール (commentaire) と呼ばれるテキスト評釈は、指定されたひとつのテキストについて厳密な解釈と批評を行う。高校のフランス語のプログラム (日本の学習指導要領にあたる) には、「個人的な鑑賞を形成してその正当化を行うために、読みの仮説を立てて解釈を提案し、主要な様式 (スタイル) や修辭的、詩的な効果を探し当ててテキスト評釈の支え (論拠・証拠立て) とする」と記されている (MEN, 2010)。そして、学習した文学作品を時代と文脈及び文学ジャンルに位置付けられる文学史の知識の習得に加え、「美的な鑑賞と分析を行うための評価の判断基準を鍛えること」が目的として挙げられている (MEN, 2010)。この文学鑑賞のための「評価の判断基準」は、以下に説明するテキスト評釈の書き方の型と公式に明示されている。

テキスト評釈にも書き方の「型」がある。分析のために必要な要素があり、それらを二つないし三つの軸 (axe) と呼ばれる解釈の視点で構造化する。文学の解釈と批評はどのように行い、論述するのかを、テキスト評釈の書き方の手順を追いながら見ていこう (参照した資料については注4および「参考・引用文献」に記した)<sup>4</sup>。

以下では三つのステップに分けて手順を解説する。テキストを分析する、解釈の軸を決定する、全体の構成を作る、の三つである。最後に実際に書く時の守るべき鉄則を述べる。鉄則からは、パラグラフの構成と全体の構成が同じ原理で組み立てられる事で、論理的な一貫性が担保されるのがよく分かる。

### (1) テキスト分析の公式

#### —テキストの身分証明書を作る—

テキストを要素に分解するのは、すべて軸と呼ばれる解釈の視点を見つけるためである。軸の発見は、プログラムに記された「読みの仮説」に当たる。そのためには、まずテキストの出典を確認し、指定されたテキストが文学運動と作家の伝記的な文脈のどこに位置づくのかを把握する。提示されたテキストの冒頭には、著者、作品名、書かれた時期と簡単な背景説明が記されているので、そこで出典が確認できる。この情報は、「導入」の部分に必要なテキストの背景の説明に必須の情報である。

次に10分から15分かけてじっくりテキストを読んでノートを取る。最初の読みでは性急に軸を探そうとはせず、テキストの意味を間違いなく取るように努め

る。2度目の読みでは評釈を書くアイデアを探すために、印象を書き留める。何か驚く事はないか、目立つ言葉や表現はないか、特別な語の使い方をしていないか、何に魅了されたかなどをメモ書きする（Brogly et al., 2007: 19）。3度目の読みでは、テキストの分析に必要な要素を使ってテキストの一般的な特徴を掴む。以下の6項目は「テキストの〈公式〉」を割り出すための要素とされる（Duvan, URL）。それらは、

1. どの文学ジャンルか（小説・詩・演劇・弁論）、
2. どの文学運動に位置づけるのか（ロマンティズム・自然主義・シュールレアリズム等）、
3. タイプは何か（喜劇・悲劇・主張の弁論など）、
4. テーマは何か（死・愛・人間の限界など）、
5. 表現の効果は何か（喜劇的、悲劇的、悲壮的、叙事詩的、叙情的、幻想的、現実的、論争的、風刺的、教訓的など）、もし表現の効果がはっきりしなかったら、テキストを特徴づける形容詞を自分で考える（絵画的、痛烈で扇動的、メランコリックなど）、
6. 作家の意図・目的は何か（風景の描写・体制の批判など）である。

テキストによっては、複数のテーマや表現の効果を扱っている場合があるので、それにも気をつけながら、厳密な公式を完成させる。これらの6要素は一覧表にして整理する。六つの要素は、いわば「テキストの身分証明書」に当たるもので、それを見ればテキストがいかなる要素によって成り立ち、アイデンティティとしての特徴を示しているかがわかる。

## （2）解釈の軸を決める

テキストを要素ごとに特定して一覧表を完成させたら、似た言葉、関連しそうな言葉を同色のマーカーでアンダーラインを引く。フランスの高校生が常に複数の色のマーカーをペンケースに入れているのはそのためである。マーカーの色に導かれながら、それらを二つか三つにグループ化して、意味のあるまとまりを作り、解釈の軸を決める。次に見つけた解釈の軸を正当化（論証）する。解釈の軸を論証するための具体例となることばや表現をテキストの中から拾い出す。軸を見つけるには、「私はあなたに（具体的な解釈の軸を）示す、このように示す」と考えるように努めることが勧められている（Duvan, URL）。このような決まり文句で考えることによって、自分はテキストについて「議論する」のだという自覚が生まれるからである。評釈といえども、作者が書いたことを単に他の言葉で言い換えるだけでは不十分である。従って、「アナトール・

フランスはこう言っている」と考えてはいけない。そして書いてはいけない。なぜなら、そのように書くとテキストの「解釈」ではなく、「説明」になってしまう危険性があるからである。

解釈の軸を考える時には、テキストから距離を取るように努める。例えば「この詩人は（固有名詞ではなくこの詩人と表現する）、この詩において風景の描写と妻の死を同調させている」と書く。こうすることにより、内容の叙述や説明ではなく、初めて解釈の軸になる。軸が決まったら、厳密に言語化する（ステップ4）。

## （3）全体構成を精緻化する：解釈軸による構造化と順位づけの原理

次に、色分けした要素を解釈軸ごとに振り分けていく。この時、一つの軸に対してメモ用紙1枚にまとめると、視覚的にも物理的にも仕分けがしやすくなる。メモ用紙に、軸1、軸2、軸3と書いて、それぞれの紙に書き手の主張となる解釈軸を書き、その下に主張の根拠になりそうな表現をテキストから書き出す。それらの表現をそのまますべて引用するわけにはいかないので、ここで初めて言い換え（パラフレーズ）を行って要点を抽出する。次に主張を支える論拠となる二つから三つの下位部分を形成する視点を考える。この場合も論拠になりそうなテキストの表現をグループ化して下位部分のそれぞれの視点を考える。そして下位部分の視点を言語化する。こうして、展開部分に当たる三つの軸の構成を完成させる。軸の順番および、軸内の引用の順番を決める時には、まず最も単純で明らかなものから始めて、より複雑なもの、明白でないものへと進むのが順番を決定する原理である（Cassou-Noguès et Hébert, 2018; Duvan, URL）。この順番の原理に一貫して従うことが、論理的な一貫性を保つのに役立つ。

次には、導入と結論の部分を書いて推敲する。導入の部分は、四つのステップから構成された一つのパラグラフで書く。まず作品について説明し（作家とテキストの歴史的な背景・文学ジャンル）、次に文学史の中にテキストを位置付け、その上で問題提起して議論すべき課題を提示し、最後に評釈の論文全体の構成を告知する。結論は、二つのステップ（全体の議論を振り返り、結論を述べて終わる）で構成された一つのパラグラフで締めくくる。この時、他のテキストの分析の可能性を述べて終わっても良い。それが次の議論の始まりとなり、議論が続いていく印象を与える。それが弁証法の終わり方の理想的な形である。

#### (4) 論証と書き方の鉄則—ICQの原理

以上のようなテキストの分析、解釈の軸の特定、全体の構造化の手続きを経て実際に書く時にも、基本的な法則がある。一つのパラグラフ（段落）を書く時には、三つの構成要素を必ず入れる。これはICQの原理と呼ばれるものである（Duvan, URL）。まず①書き手の考え（*Idée*）を述べる、次に②書き手の考えを根拠づける引用（*Citations*）を提示する、③そして書き手が示した根拠の適正さの証明（*Qualification*）を行う、の3要素である。根拠の適正さの証明とは、「引用」についてさらに説明を加えて、根拠としての適切さを示して考えを補強することを指す。例えば「この引用は「動物化」の修辞技法を使っており、動物に喩えることによって…という効果を生み出している」という説明が根拠の適正さの証明に当たる。つまり、引用した部分は文学的になどのどのような意味があるかの説明を行うのである。

ICQの原理と呼ばれる段落を書く方法は、テキスト評釈の三つの構解釈軸それぞれの論述を成り立たせる基本ブロックとなると同時に、それらを統合した展開部分全体の構造の基本ブロックともなるものである。すなわち、どの部分も主張とその論拠、引用による論拠の例証+例証の意味づけで成り立ち、こうした小さな論証の基本ブロックと大きなテキスト評釈の構造が一貫した構造を持つことにより、読んだ時に「論理的」である感覚が「読み手」に生まれる。何よりも「書き手」がこの構造で考える事により、複数の考えを整理しつつ組み立てて、複雑な議論を理路整然と行えるようになる。

以上のような手続きを経て完成したテキスト評釈の解答例の構成を以下に挙げる。構成のみでもテキスト評釈とはどのようなものなのか、そのイメージがつかめるだろう。日本の読解問題との違いもよく分かる。さらに、先に見た基本問題を解く論述の書き方が基礎にある一方で、テキスト評釈では何がどのように応用されているのかも理解できる。基本問題に見られた「総合的な構成」と、評釈で求められる「分析的な構成」の違いにも注目して見てみよう。

#### 【導入】

・**テキストの説明**：歴史的、美学的、作家の伝記的文脈にテキストを位置付ける高踏派の詩人、文芸評論家、小説家であり、アカデミー・フランセーズ会員でノーベル文学賞受賞者でもあるアナトール・フランス。外国人差別や植民地化を告発して多くの政治

運動に参加。ゾラと共にドレフェスを擁護して、ゾラが訴訟された際には弁護のために証言台に立ち、ゾラがレジオン・ドヌール勲章を剥奪された際には自らの勲章も放棄し、同じ理由でアカデミー・フランセーズも退会。共通の政治的立場で闘った友人として自然主義派の旗手であったゾラを追悼式で讀えた演説（弔辞）のテキストである。

#### ・問題提起（課題の表明）

ゾラへの賛辞を効果的にするために演説者はどのような手法を用いているか。

#### ・全体構成の告示

「ゾラの友人という特別な立場の強調」と、「人間として作家としてのゾラへの賛辞」の二つの解釈軸のもとに、演説者の聴衆を引きつける多様な手法とその効果を分析する。

#### 【展開】

#### 解釈軸Ⅰ. アナトール・フランスによる故人の「友人として」の演説技法

論拠1-1：ゾラの友人という特別な立場の強調（演説の冒頭の「掴み」の分析）

例証1 = 「一人称での語り」によるゾラへの親近感の表明

例証2 = 「逆言法」による過度の悲壮感を避ける演説者の苦悩の表明

例証3 = 「文章のリズム」による悲壮感・不平・泣き言の拒否の強調

例証4 = 「不定形容詞」で補強された人称代名詞（「私自身」）によるゾラとの親密性の強調

[移行] したがって、アナトール・フランスがその弔辞を述べるのは、エミール・ゾラの友人としてである。しかしそれは、より聴衆の注意を引き、そして聴衆から好感をもたれるように、慎みを示し、過度の悲壮感を拒絶する友人としてなのである。

論拠1-2：教育的であろうとする友人として（前の演説の総括と自身の演説との対比）

例証1 = 動詞の活用のバリエーション（「たった今聞いた」、「お聞きになった」）によって聴衆の想起の手助けをする

例証2 = アナトール・フランスの前の演説者たちの社会的地位とそれに呼応した演説の対置による関連づけ

例証3 = 各演説者の地位と賛辞の構造的な類似に対比させて友人としての自分の立ち位置を強調

[移行] アナトール・フランスは、自分に先立つ演説の方向性を手際よく振り返る。それによって、アナトール・フランスが友人として、先行する演説者たちを補足する観点を採用するだろうということを、聴衆は理解できるようになる。また同時に、それによって、アナトール・フランスはその演説の展開に聴衆を引き込むことができる。

論拠1-3：演説の展開に引き込むための聴衆との一体感の醸成

例証1 = 聴衆への丁寧な呼びかけと許可を求める表現による謙遜の表明

例証2 = 最後の演説者という特別な役割の表明（作品のみならずゾラの人間の賛辞を行う）

例証3 = 効果的な「私たち」の使用。演説者と聴衆の垣根を取り払って一体感を醸成し、ゾラ作品と人間の偽りのないイメージを伝える意図を表明。

[解釈軸2への移行]：アナトール・フランスは、ゾラの親しい友人という立場を様々な技法で強調する事によって、聴衆の気を引くような仕方でも彼の演説を演出している。そうすることで、聴衆の信頼を勝ち得て、演説の展開への期待感を聴衆に抱かせるのである。

## 解釈軸Ⅱ. 人間として、そして作家としてのゾラに対する称賛のための演説技法

論拠2-1：その規模と偉大さにおいて記念碑的な作品に対する称賛

例証1 = 語彙場によるゾラ作品の偉大さの強調（規模に関わる広範な語彙を用いて作品の「大きさ」と「偉大さ」を強調。巨大かつ堅牢な建造物にゾラ作品を喩える。）

例証2 = 非難の語彙場と称賛の語彙場の対比により、社会からの攻撃と攻撃に屈しない不動の信念によって一層高まるゾラとゾラ作品の価値を強調

例証3 = 非難と称賛の二項対立による対比のリズムがもたらす高揚感。「そして」という等位接続詞は、単なる接続の意味のみならず、その前提として非難や攻撃にも関わらずという強調の意味が含まれる。革命家としての作家の帰結と賞賛をより際立たせる効果。

[移行] ゾラは、葬儀の際には、その作品の記念碑的な性格によって大作家として認められていた。様々な派閥からの轟々たる非難にも関わらず、彼は自らの作品

を作り上げることができたのである。しかし、作品の規模だけでは、彼の偉大さは証明されない。

論拠2-2：その社会的、道徳的アプローチにおいても記念碑的な作品に対する賞賛

例証1 = 「道徳的」なものであるゾラの小説（テキストからの引用）

例証2 = 「社会的なものと道徳的なものとの結びつき」から説明できるゾラの政治的なコミットメント（テキストからの引用）

[移行] 社会的であると同時に道徳的でもあるゾラ作品は、実のところ、著者の人間性を反映している。

論拠2-3：演説者はゾラ作品の賛辞を通じて人間としてのゾラを讃美する

例証1 = 作品から切り離すことができない創作者の人間性を反映する作品（テキストの引用）

例証2 = 美称的な語彙場とそれを強調する副詞の効果 = 最上級の讃辞（テキストの引用）

例証3 = 単純過去の使用は客観的な過去の事実を述べる。ゾラの闘争には小説による表現のみならず、政治的行動が伴っていた事実を指摘。

[移行] このように、アナトール・フランスは、友人の肖像をその作品から描きだすことに成功した。そのために、この友人の道徳的な美点やその政治参加を強調している。

**【結論】** アナトール・フランスは、ゾラに対する弔辞の導入部を、聴衆の気を引くような仕方でも構成している。その際、彼は控えめに故人の友人として、そして先行する賛辞を要約し、自らの賛辞に聴衆を参加させることのできる教育者として、自らを提示する。それは、その規模と、社会的かつ道徳的な側面によって記念碑的なゾラ作品にだけではなく、とりわけドレフュス事件の際にアナトール・フランスがともに戦った友人としての作家自身に対しても、敬意を捧げるためなのである。

このように、短いテキストの分析といえども、テキスト評釈にも「論述の型」がある事がわかる。「導入」・「展開」・「結論」の3部構成で、展開部分は二つないし三つの主張から成り、その主張の論拠が三つの下位部分として置かれ、さらなる下位部分でそれぞれの論拠を例証する。

こうした3部構造は、ディセルタションと共通するが、テキスト評釈に独自の方法としては、展開部分を成り立たせる解釈の軸を立てる時に、その根拠となるテキストの分析の要素が明確に決まっている事であ

る。テキストの特徴を割り出すための六つの要素は、テキストを読み解くための「公式」と呼ばれ、その公式を使うことによって高校生でも評釈ができるようになる。さらに、決まった構造に沿って書く努力をするだけで、かなり複雑な解釈が可能になる。そして、一度書く方法を理解して身につければ、どの文学ジャンルを分析し解釈する時にも共通して使用できる強力なツールになる。論述の演習は、考える演習になると受けとめられている所以である。

## 6. 文学の「テキスト評釈」にみる論理

ここまでフランス語科目のバカロレア試験の論述問題を構成する三つの型のうち「テキスト評釈」の書き方を、基礎問題とともにバカロレア試験の問いに答えながら分析した。

文学評釈というと、文学に関する膨大な知識と高度な技術を持っていなければならない特殊なものと考えがちである。しかしフランスの高校においては、どのように行うかがシステムティックに考え抜かれ、公式として示されているのが特徴である。段落の構成方法と評釈全体の構成方法が形式化され、文学の分析方法も公式のように形式化されているため、生徒はこの公式に沿ってテキストを分析し、全体の構成を組み立てれば、解釈と批判的な視点を兼ね備える評釈を書けるようになる。

文学を論理的に論じる仕掛けは、段落をICQの原理と呼ばれる論証の基本ブロックで書き、その基本ブロックを三つの分析視点それぞれで積み上げていって全体の構造を作ることにある。小さな論証の基本ブロックと大きなテキスト評釈の構造が一貫した構造を持つことにより、厳密な論証ができると同時に、「論理的」である感覚を「読み手」に与えることが出来る。そして、書き手はこの構造で考える事により、複数の考えを整理しつつ組み立てて、複雑な議論を行うことが可能になる。

付言すれば、読み手と書き手の間に「テキスト評釈」とはいかなるもので、どう書くのかの共通理解があることで、読み手は評釈に期待する必要な要素が期待どおりの順番で並んでいることで、その期待に導かれながら読み、書き手の主張に納得することが容易にできるのである。

本稿では扱わなかったが、フランス式小論文のディセルタシオンは、テキスト評釈の三つの解釈軸を、〈正一反一合〉の弁証法の構造に配置することで、結論にあたる〈合〉で矛盾を解決してより大きな視点を提供する。そのようなはなれ業を高校生が行えるのは、テ

クスト評釈でまず文学の論証方法と分析の方法を学ぶからである<sup>5</sup>。

さらに高校1年生と2年生で行うテキスト評釈とディセルタシオンの訓練は、高校の最終学年で行う哲学教科の「テキスト説明 (*explication de texte*)」と「ディセルタシオン」執筆の基礎となる。哲学教科はそれまで学校で習ったすべての知識を審議にかける公教育の仕上げと考えられており(綾井, 2018)、抽象的な概念を扱うために、哲学のテキスト解釈とディセルタシオンがフランスの書く教育の最終到達点とされている。その到達点への準備は、高校2年の学年末に行われるフランス語のバカロレア試験によって行われているのである。

フランスのバカロレア試験の論述問題にはそれぞれ「型」があり、それは「問い」の性質に応じた論文の構成方法としてバカロレア試験のフランス語の参考書に明示され、授業においても教えられている。テキスト評釈とディセルタシオンの論述形式にはそれぞれに幾つかの論文構成の型があるため、それらは書き方のメニューとして生徒が学習し、実際に書いて訓練することを可能にする。ここに毎年50万人を超える高校生が論述問題によって中等教育修了試験を受けることができ、その採点が可能になる根拠がある。生徒が一から論じ方を考え出す必要は無く、生徒と採点者の間で、論文を書く基本的なルールと分析方法の理解があるからである。生徒も採点者も、論理的に整い、条件を満たす論文とそうでないもの、そして合格と不合格を分ける基準を持っているからである。そうであるので、生徒同士でテキスト評釈やディセルタシオンの採点をさせても、教師の採点とほとんどブレが無いという。それどころか生徒の方が厳しい点をつける傾向すらある(渡邊, 2021: 131)。

日本では、2022年より高校の国語科の編成が大きく変わり、必修科目が「現代の国語」と「言語文化」に分かれ、選択科目も「論理国語」と「文学国語」に分かれたため、あたかも「論理」と「文学」を相反する領域であるかのように示すことにならないか、さらに新たな編成方法が、文学軽視につながらないかとの懸念が示された(日本学術会議, 2020: 7)。文学を題材に論理的に論じることが可能であること、そのためには文学批評の方法と書き方のある程度の定型化が必要であることをフランスの例は示している。

文学を深く読み味わいながら、文学批評の書く訓練を同時に行うフランス独特の高校の文学教育の制度と実態、さらに文学教育を貫く価値観の伝授については、渡邊(2021)を参照されたい。



## 〔参考・引用文献〕

- アリストテレス. 2017. 『アリストテレス全集18 弁論術・評学』堀尾耕一, 野津悌, 朴一功訳 岩波書店.
- 綾井桜子. 2018. 「リセの「哲学」における「深い学び」とは—自律した思考のための教育—」『フランス教育学会紀要』30: 17-26.
- Brogly, Luc et al. 2007. *Les incontournables: Tout ce qu'il faut savoir et savoir faire Bac Français 1<sup>re</sup>*. Paris: Rue des écoles.
- Cassou-Noguè, Anne, et Séléna, Hébert. 2018. *Annales ABC du bac 2019, Sujets & corrigés, Français, 1<sup>re</sup>, L·ES·S*. Paris: Nathan.
- ジェラルド・ジュネット. 1989. 『修辞学と教育』『フィギュールII』和泉涼一, 神郡悦子, 花輪光, 小田淳一, 矢橋透訳 水声社, pp.29-47.
- Lisle, et al. 2017. *Annales Bac 2018, Sujets et corrigés, Français Ires L/ES/S*. Vanves: Hachette.
- Ministère de l'Éducation nationale. 2010. *Bulletin officiel spécial n°9 du 30 septembre 2010*. (フランス国民教育省の官報。本文中では (MEN, 2010) と表記).
- 坂本尚志. 2022. 『バカロレアの哲学—「思考の型」で自ら考え、書く』日本実業出版社.
- 上垣豊. 2020. 「バカロレア試験で問われる思考力・表現力の歴史的変遷—ディセルタションへの道程」『フランスのバカロレアにみる論述型大学入試に向けた思考力・表現力の育成』細尾萌子・夏目達也・大場淳編 ミネルヴァ書房, pp.59-73.
- 渡邊雅子. 2012. 「ディセルタションとエッセイ—論文構造と思考法の米仏比較」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』58 (2), 1-13.
- 渡邊雅子. 2021. 『論理的思考の社会的構築—フランスの思考表現スタイルと言葉の教育』岩波書店.

## URL

- 日本学術会議 言語・文化委員会 古典文化言語部会 (2020) 「定言 高校国語教育の改善に向けて」  
<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-t290-7.pdf> (最終閲覧2022年7月15日).
- «Les tutos du bac de français -Le commentaire de texte»  
<https://www.youtube.com/watch?v=ErsqP0F3als>  
(最終閲覧日2021年7月15日).

## 〔注〕

- <sup>1</sup> 本稿はフランスの思考表現スタイルと言葉の教育を著した『論理的思考の社会的構築』（2021年刊行）の編集段階で削除した「テキスト評釈」部分を論文の形にまとめたものである。今後、バカロレア試験の「創作文」の論述問題についても論文化する予定である。
- <sup>2</sup> フランス語科目の文学は、「小説における人物像（17世紀から現代まで）」、「演劇特有の表現方法（17世紀から現代まで）」、「詩における意味と感覚の探求（中世から現代まで）」、「論証における人間の存在に関する問い（16世紀から現代まで）」の四つの文学ジャンルと各ジャンル固有のテーマを学習することになっており、バカロレア試験の問題もこれらのジャンルとテーマから出題されることになっている（Cassou-Noguès et Hébert, 2018）。
- <sup>3</sup> 解答例はCassou-Noguès et Hébert, 2018: 227-229を翻訳のうえ、抜粋し引用した。
- <sup>4</sup> テキスト評釈の説明には、教科書の代表的な出版社でもある3社の参考書、アシェット社（Lisle, Beauthier, et Grandic, 2017）、ナタン社（Cassou-Noguès et Hébert, 2018）、リユー・ド・エコール社（Brogly et al., 2007）と、以下のURLおよび筆者によるリヨンの調査のインタビュー結果（2008年5月）を参考にした。「Les tutos du bac de français -Le commentaire de texte」（最終閲覧日2019年2月24日）本文中では（Duvan, URL）と表示した。  
<https://www.youtube.com/watch?v=ErsqP0F3als>
- <sup>5</sup> フランス式小論文のディセルタションについては、詳しくは本稿の参考・引用文献（綾井, 2018; 上垣, 2020; 坂本, 2022; 渡邊, 2012; 2021）を参照されたい。



## The Baccalaureate “Commentary on Texts” – Structure and Formulas for Logically and Critically Discussing Literature

Masako Ema WATANABE\*

This paper holds up one example of a method of critical thinking and analysis in essay-test form. The “commentary on texts” (*commentaire de texte*), one of the essay formats for the French language subject of the French baccalaureate exam, presents an example of how an analysis of literature combined with knowledge of how to write a commentary via a problem-solving method, can prove effective. Providing a structure for writing commentary makes it possible for high school students to write logical and critical textual commentaries by mastering essay formulas. This paper argues that through training in commentary on texts, one can develop meta-abilities, such as the ability to find a perspective for analysis and create complex arguments in a logical manner—qualities which have often been regarded as something alien to literary appreciation.

The mechanism for logically discussing literature is to write paragraphs in terms of the basic blocks of argumentation (claim + argument + citation + validity of citation), called the ICQ principle, and then build up these basic blocks from each of the three analytical perspectives to create the overall structure. This consistent structure made up of integral blocks of argumentation and large textual commentary allows for rigorous argumentation; at the same time, it allows the “reader” to gain a sense of what elements of a text are “logical.” This structure allows the “writer” to organize and assemble multiple ideas and conduct complex arguments in a logical manner.

Analyzing a literary text involves clarifying six elements called the “textual identity card”—the explanation of the text positioned in its literary movement and historical context, its literary genre, the theme, register, type of text, and author’s intent and purpose. The text is then broken down into elements according to meaning, and three perspectives for analyzing the text are presented that constitute the hypotheses used for textual interpretation. The principle that determines the order of the three perspectives structures them side by side, starting with the simplest and most obvious and working up to the more complex. This principle of order is also applied when determining the order of claims and examples in arguing each perspective. Consistently following this ordering principle also helps to maintain logical coherence.

Since there is an understanding between the student and the grader of the basic rules and methods of analysis for writing commentary on literary texts, there is no need for the student to develop an argument from scratch. This type of test offers a solid criteria for all high school students in France to take and receive clearly interpreted scores on their secondary school completion examinations by means of essay questions.

---

\* Professor, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

